子どもたちへのメッセージ集　２００６

～　命の尊さと震災の教訓を語り継ぐ　～

はじめに

平成7年1月17日、阪神・淡路大震災があり、

多くの方が亡くなり、家を失いました。

その大災害を経験された方たちから、命の

大切さや震災から学んだことを子どもたちに

伝えるために寄せられたメッセージを載せています。

みなさん、ぜひ読んでみてください。

子どもたちへのメッセージ集 2006

～命の尊さと震災の教訓を語り継ぐ～

もくじ

✉ 子どもたちへのメッセージ（26通）

ポエム1 …… 1 ページ
命の大切さ …… 2 ページ
さまざまな体験 …… 8 ページ
災害への備え …… 15 ページ
ポエム2・3 …… 18 ページ
体験から学んだこと …… 20 ページ
感謝の気持ち …… 25 ページ

※ 内容によってテーマ分類しています。

※ 経験や想いを尊重してお伝えするため、誤字・脱字を除き、メッセージを原文どおり掲載しています。

✉ メ　モ …… 27 ページ

✉ 子どもたちからの感想文（4通）…… 28 ページ

✉ さいごに
子どもたちへのメッセージ運動の概要 …… 32 ページ

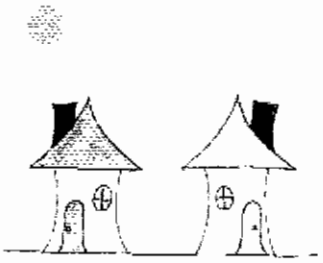
✉ 阪神・淡路大震災関連資料 …… 34 ページ

※ 阪神・淡路大震災関連資料は、震災10年～神戸の記録～（平成16年10月神戸市広報課発行）と「阪神・淡路大震災　被災状況及び復興への取り組み状況」（平成18年1月1日現在）によるものです。

ポエム1

子どもたちへ

“忘れないでください”



いつものように　夕食を食べて
いつものように　お風呂に入って
いつものように　「おやすみなさい」

当たり前の毎日が　途切れた日
一瞬の出来事が　いつもの明日を奪った
来るはずの朝を　暗闇が覆い尽くした

泣き叫ぶ声　震える人々　立ち尽くす大人たち
揺れる僕らの家　崩れる僕らの町
「おはよう」が消えた日　笑顔が消えた日

あれから10年がたちました
あなたは　あの日の事を覚えていますか？
いつもの毎日を奪った日
大切な人を奪った日　笑顔が消えた日
忘れたくても　消えない光景

忘れないでください
悲しみを乗り越え　壊れた心を　崩れた町を　元通りにしてきた
この10年を　決して忘れないでください

18年1月12日

子どもたちへ

このまちでとても大きなじしんがおきたのは、あなたがうまれる、ずっとまえのことだから、あなたにはきっとよくわからないとおもいます。とてもこわくてたいへんなできごとでした。

あなたがこのまちに生まれてきてくれたので、ママはぜひしっていてほしいとおもったのでこのまえいっしょに「人とぼうさいみらいセンター」にいきました。きっとはじめてみるじしんのすごさやこわさにおどろいたでしょうね…そしてじしんのえいぞうを見て、おもわずなみだをながしていたママをみてきっといろんなことをかんじてくれているんだなぁっておもっています。

じしんがおこったとき、たんすがたおれたりテレビがとんできて、でんきはてんじょうからおちてきたりとたいへんだったよ…でもけがをしたりしなかったから、がんばってあるいてあるいておひるごろにやっと、がっこうのたいいくかんでやすむことができました。

あるいているとちゅうでたくさんのかじもみました。

いまはほんとうにまちもきれいになってじしんがあったとはおもえないでしょうが、いっしょにみた、じしんのえいぞうはママの目のまえでほんとうにおこったことなんだよ。あなたがすこしずつおおきくなっていくあいだにすこしずついろんなことをかんがえたり、かんじたりしてくれたらいいなっておもっています。

また「人とぼうさいみらいセンター」へいこうね…

平成18年1月11日　ふじわらあき

命の大切さ

子どもたちへ

私の長男は当時8才、小学2年生で、地震の為、遠い天国へ一人で先に旅立ってしまいました。

母である私、1才違いの妹、2才違いの弟、そして震災後に誕生した弟（今は亡くなった長男と同じ小学校へ通い、長男の当時の年令より1才上になり9才、小学3年生となりました。）、そして父、この5人で、お兄ちゃんの分まで、今、生きている私たちが、がんばろう！！と、必死にがんばってきました。

地震では生きたくても無念にも亡くなられた数多くの方々がいらっしゃいます。

その方々の事を思う時、今、生きている私たちに何が出来るだろう？と考えるとそれぞれが、精一杯がんばる事だと思うのです。

私はいつまでも長男の事は忘れません。亡くなっても私の心の中ではいつも生きているのです。私たち家族と共に。

H17年12月11日（日）　堂内有香

子どもたちへ

あの日まちはいろをなくした。

まちはまちでなくなった。

じかんはとまった。

しずかだった。

“ゆめであってほしい。”そうおもった。

しんさいのときいえやたてものがこわれ、大切ないのちがうしなわれ、神戸のまちは“はいいろ”になったような気がしました。えいがやテレビの中でのできごとのようにおもえて、これはうそなんだ、げんじつではないんだという、そんな気がしました。でも、ゆめではなかった。そう気づいたときわたしたちは“生きるため”にうごきはじめた。みんながおなじおもいでいられたからたすけあうことができたんだとおもいます。おたがいをおもいやることができたのだと。

あなたたちにはそんなおもいはわからないかもしれないけれど、いつどんなことがあるかわからない。じぶんたちのいのちを大切に生きてほしいです。

2006年1月20日　1年生のママ

命の大切さ

子どもたちへ

こうべのまちが大きな地しんにおそわれたとき、一ねんせいはまだうまれていなかったね。五ねんせいや六ねんせいは小さな赤ちゃんだったころのことです。

こうべはそれまであまり地しんもなく、とてもすみやすいまちだとみんながじまんにおもっていました。

それが、はんしんあわじだいしんさいという大きな地しんで、大きなビルもたくさんたおれて、たくさんのかじがおきて、たくさんの人がいえをなくしたり、ケガをしたり、いのちをうしなったりしました。こうべの人はすごいショックをうけました。

わたしのいえはだいじょうぶだったけど、まわりのおうちがたくさんこわれたり、かじでもえていくのをみて、なにもできないのがかなしくてこわれたおうちやかじにあった人たちのことをおもって「かみさまたすけてください」とこころのなかでさけびました。こうべのひとみんながつらいかなしいおもいをのりこえて、たすけあって、すこしづつまちをつくりなおしていったんだよ。

みんなつらいおもいをしたけれど、けれどやさしいきもちをうしなわなかった。たすけあうことは大きなちからになるってことよくわかったよ。みんなにも、つらいときでもだれかにやさしくできるつよさをもってほしいナ。やさしいことばのひとつでもだれかのちからになれることもあるんだから。

子どもたちへ

～震災で心に残ったこと～

震災直後にはとてもたくさんあったけれど、今は全くなくなってしまった、ちょっと特別な『張り紙』があります。

私はここにいますと書かれた紙。

避難先を示すことが目的ですが、自分を思いやってくれる人に「私は生きていますよ」と伝えたい気持ちが込められています。

市役所の 1階ロビーにも重なるようにたくさん私はここにいますが張ってありました。

“私はここにいます･･･以前の居場所はなくなってしまったけれど、まだ存在しています。”と静かに強く 1枚1枚がうったえかけてきます。

ふだん考えもしない「存在していること」の不思議さが、私の胸に押し寄せてくるようでした。

今こうしてあること、生きていることのありがたさを張り紙が教えてくれました。

2006 年 1 月 17 日　灘子

命の大切さ

子どもたちへ

我が命 健太へ

平成7年1月17日(火)午前5時46分…… 未曾有の大地震は一瞬にして尊い多くの生命を奪った。あれから11年。震災でボロボロに傷ついた故郷「神戸」もその外観は見事なまでに復興した。まもなく「神戸空港」が開港する。そして当時、同じく被災しながらも九死に一生を得た私たちは今こうして元気に日々過ごしている。しかし震災によって亡くなられた多くの方々のことを思う時……私たちは今日も元気に「生かされている」ことへの感謝の念を決して置き去りにしてはならない。光陰矢の如し……大地震襲来の、あの早朝命からがら全壊家屋から救出した生後10カ月の赤ん坊だった息子(健太)も今春4月で中学生になる。これからも歳月は10年、20年……と過ぎてはいくが後生に伝えていってほしい。いくら人間が「文明の力」を誇らしげにしようとも「自然の怒り」のエネルギーが生み出す驚異のパワーからすれば、それは「無力」に等しいものであることを。人間は自分たちの科学や技術を慢心してはならない。「天災は忘れたころにやって来る!」ということを肝に銘じて、そして「防災」の意識を高めつつ「自然との共生」を真剣に考えながら未来へ向かって一歩一歩すすんでいってほしい。

平成18年1月17日

神戸生まれ
神戸育ち

父
水元忠義
より ※

※記名でお願いします。

No. 233

子どもたちへ

朝、5時46分に地震が発生。長田区に住んでいた3人の家族。

電気、ガス、水道はストップ。おとうさん、おかあさんは我慢はできる。でも6ヵ月の赤ちゃん、りょうは何もわかりません。それよりも時間が経つとお腹がすいて、“ギャーギャー”泣きます。ガスが出ないので、お湯をわかせない。“お湯がない”その時、となりの家の人がポットの湯で1回ミルクを飲むことができました。でも5時間ぐらいでまた"お腹がすいたよギャー"と泣くよ。次はどうしよう。カセットコンロがあればいいんだけど、店はあいていない。

しかし、町へ出かけたら、近くのコープが店頭で店を開き、30人ぐらい並んでいました。店の人が中から、売れる商品を並べて売っていました。私はその時、店の男の人に言いました。“赤ちゃんがいるんです。ミルクをあげるのに、湯をわかすカセットコンロがいるんです。ありますか？もうすぐ、お腹がすくんです。”男の人は“それは大変だ。ちょっとさがしてくる。”と言い、10分ぐらいして、“ありましたよ。1コだけ。箱がつぶれているけど、中は大丈夫。カセットボンベもないんでしょ、持ってきたよ。”といってくれました。その時の親切は、今までも忘れません。

カセットコンロでは、お風呂に入れなかったりょうのおしりを洗って、かぶれないようお湯をわかしました。

11年経った今、町は元にもどりつつあるけれど、震災も経験したことは、心のどこかに忘れられない、想いがあります。

2006年1月17日　仲間純子

子どもたちへ

その朝、一瞬にして木造2階建ての家屋は倒壊、家屋はぺしゃんこになった。家族5人のうち私と長男（大学生）が自力で脱出、妻と娘2人が家屋の下敷きになった。

娘2人は並んで生き埋めになっていたが、近所の名も知らぬ、顔も知らぬ数人の若い人たちに助け出された。

一方妻は、倒れた和ダンスや大きな梁（はり：屋根を支える大きな材木）さらに崩れ落ちた屋根などの下敷きになっていた。「痛い、苦しい、助けて一」と叫ぶ妻の救出は大変だった。私と長男でやっと救出はしたものの、骨盤が3ヶ所骨折した痛みと、1時間程重い瓦礫に圧迫され続けたことで妻の体は衰弱しきっていた。ショックと激痛で寒さを感じるどころではなかったのだろうか、瓦礫の上で「このままじっと寝ていたい」と言う。そのまま様子を見ていたが、集まって来てくれた人たちが「こんな寒い所にけが人を置いておいてはいかん、すぐ病院に運ばんと！」と叫び、急遽妻を戸板に乗せ瓦礫の山の中を運び出すやら、車の手配をするなどして病院に連れて行ってくれた。途中の道路が陥没したり、行き先の病院そのものも半壊で機能はマヒしていた。

到着後、妻は呼吸が苦しくなることがあったが、看護婦さんの指示でポリ袋を頭からかぶったり、少しの水を与えられたりして小康を得、次の病院に送られ、手当てを受けることができた。妻・娘2人はそれぞれ一命をとりとめた。

娘2人が生き埋めになっていたすぐ近くで、私のネクタイピンがぺしゃんこになっていた。もし娘たちがネクタイピンと同じ運命にあったらと思うとぞっとする。

また、妻については、

あの時、落ちてきた梁がもう少しでも体に近ければ　・・・・・

私や長男が、自力で脱出できてなければ・・・・・

病院へ搬送するのに近所の方々の援助がなく手遅れになっていたら・・・・・

病院で看護婦さんの適切な指示がなかったら・・・・　など

これらのうち、ひとつでも欠けていたら妻は助からなかっただろう。

ある種の偶然と多くの人々との絆により家族は助けられた。私は今も奇蹟と考えている。

人間は一人で生きているんじゃあない、例え普段は声を交わさなくても、面識がなくても、それら多くの人たちのおかげで生かされていることを改めて教えられました。若い人たちにも私が経験したこれらのことを胸にしっかり納めて、どんな逆境にあっても勇気を持って生きていって欲しい。

平成18年1月25日

神戸市長田区（震災当時）　黒田高生

子どもたちへ

1月17日今でもあの時のことをわすれていない。まるでかいじゅうが歩いているようなゴーという音、「ゴジラだ！」と思った。次のしゅんかん大きなゆれがやってきた。船にのっているようなゆれで何もできなかったお母さんがぼくの上におおいかぶさって「大丈夫、大丈夫だよ」、とずっと言っていたけど目からたくさんの涙がでていた。ゆれがおさまっても体にまだゆれのかんかくがのこっていてこわかった。台所はおさらやコップがたなからぜんぶ出ていてぐちゃぐちゃにわれていた。

空を見るとまだ外はくらかったけど長田区の方は火のせいであかるかった。そこだけ日がのぼったみたいだった。

このたいけんはどんなに年がたってもわすれることができない。

あの時のゆれのかんしょくも体にまだのこっている。

2005年12月1日　淡立裕司

子どもたちへ

私が震災を体験したのは幼稚園の年長組。5歳でした。今でもあの日、あの時のことはよく覚えています。ドーンッ!!という強いたてゆれで目がさめました。気がつくと私の上には父の体が。

そして、その父の体の上には本棚が倒れていました。当時は何も感じなかったけど、今思い直すと、いつもは頼りない私の父だけど、あの時ほど、父を頼もしいと思ったことはありませんでした。海も山もあってとても素敵だった私たちの神戸のまちはあの一瞬で瓦礫の山となってしまいました。

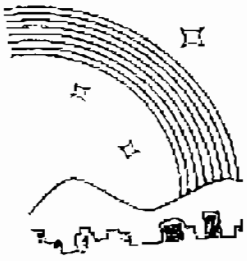
あれから10年。私は15歳になり、高校1年生です。私はこの震災で失ったもの、得たもの全てを忘れちゃいけないと思い、この震災を語りついでいかないといけないと思い、県立舞子高校の環境防災科に入りました。この防災科でもっともっと発信していき、震災を知らない子どもたちにも知ってもらいたいと思います。

できることなら、思いだしたくない嫌なこと

だけど、忘れちゃいけないことだと思う

忘れない、忘れちゃいけない　1．17

住友香織



子どもたちへ

遺体安置は遺体を荼毘に付するまでの仕事です。何千人という方が亡くなられたので斎場が足りず、周辺の県や市や町に斎場をお借りしました。真夜中に2日後の場所と人数がFAXで送られ、夜明けとともにご遺族と連絡を取り斎場を斡旋します。

ある日、津山市の斎場をお借りすることになり、パトカー先導のもとボランティアの車両に5人の方の棺を乗せてご遺族と職員1名(私)が同行しました。朝8時頃に出発したものの市内はどこも大渋滞、津山市到着は14:00をまわっていました。ところが斎場の皆さんは神戸市民のために炉を空けて待っていて下さったうえに、お弁当まで買って用意して下さいました。

そのお弁当を待合室でご遺族やボランティアの方々に配りますと、たまたま1人分足りず、皆さんにお譲りして外で待っていました。すると向かい側の事務室で斎場長が手招きをしておられる。誘われるまま中に入ると、応接セットに置かれた重箱を前に斎場長がおっしゃいました。

「地元の方がおにぎりを作って下さいました。よかったら召し上がって下さい。」

ふと何日もまともに食事をしていないことを思い出しました。

「本当に、いいんですか。」

「ええ。いくらでもどうぞ。」

重箱のおにぎりは全部で30個ありましたが私は全部食べてしまいました。

人生で一番うれしかったことはと聞かれたら、「おにぎり30個です」と答えます。

辛い記憶ばかりでなく、おにぎりやたくさんの人に助けていただいたことに感謝しながら生きていきます。

平成18年1月23日　大野浩

さまざまな体験

子どもたちへ

10年前の震災の時、お姉ちゃんは、3才で覚えてないよね。まん中の睦は、お腹の中でした。

お母さんの実家が東灘で、ぜ～んぶ家が倒れてしまって、おばあちゃんやおじちゃんやたくさんの人がケガをしました。ケガだけで命が助かったのでよかったんだけど、どこも病院がちゃんとした処置ができなくって、おじちゃんは、今、まだ足のじん帯が悪いままみたいです。

お母さんは、お腹にいる睦の事を気づかいながら車で東灘まで行きました。西区の、この家は、テレビや食器がおちたり家がずれてひびぐらいが入ったけど比較的軽くすんだので、お母さんの前に住んでいた家が気になって気になって、食べ物をもって必死に行きました。車は、灘から先は通行止めみたいになってしまってストップしたまま。国道二号線沿いをずーっと東灘まで歩きました。かわらがおちていたり家がこわれていたりで、つまづいて何度もひっくりかえりました。お腹にいるまこちゃんに「がんばって、お母さんのお腹にしがみついててね。」と声をかけながら、もうまっくらになった道を一生懸命歩きました。おしっこもがまんして、寒くてまっくらでとても心細かったけど、こんな泣き虫のお母さんでも、行けました。もう必死だったから。

お母さんのお母さんは額をケガして血が出てたけど私の事（お母さんの事）を気にして泣いていました。お母さんは、あの日の夜の事は、一生忘れません。大変な一日でした。

まこちゃん無事うまれてきてくれてありがとう。感謝･感謝です。

2005年12月14日　千恵・睦・稔の3人のお母さん

子どもたちへ

10年前の1月17日、垂水区内に住んでいた私の家では、父が仕事の都合で九州の方へ行っていたので、母と妹と私の3人でした。

突然やってきた大きな地震。最初は何が起こったのか分からず、ただ母の声だけを頼りによたよたと歩いていました。

隣の部屋では、食器だなから勢いよく皿やマグカップが落ちる音、水槽からは揺れる水と共に金魚が床にたたきつけられる音、様々な音が聞こえていました。

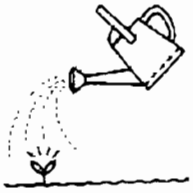
私と妹は頭に枕を載せて母親が私たちの上に覆い守ってくれました。

揺れが収まると、近所に住んでいた幼なじみの子のお父さんが助けに来てくれました。このときの私は、まだ小さくて幼かったため、何がなんだか分からなくて、多少の恐怖が残っていたことしか分からなかったのですが、今改めて考えてみると、母がとってくれた行動も幼なじみの子のお父さんがとってくれた行動も全部、助け合いだったんだなぁと思います。阪神・淡路大震災が起こったとき、被災者の方々同しでの助け合いが凄く素晴らしかったということを何回か聞いたことがあります。自分一人では不可能なことも、仲間がいれば可能になります。

あの10年前の大震災を経験していない今の子供たちに、私から何かメッセージを残すということになれば、「震災はみんな怖い。怖い分、仲間と一緒なら、1人で怖い思いを体験するより、仲間と助け合い、助け合えた分、1人1人の自分が成長できるのだと思う。」耐震化の家を沢山建てることも大切だけど、でもやっぱり1人1人の人間関係がより結びつく方が今後にもつながっていくと思います。

2005年12月16日　清水麻莉菜

災害への備え



子どもたちへ

阪神淡路大震災から11年を迎えましたが、生涯で強烈な経験であった震災の日のことは、今も昨日のことのように思い出され多くの人が命を失われたことは胸が痛みます。

中でも印象に残っていることは「水の大切さ」です。人は水がなければ生きられません。それまで水道をひねればきれいな水が出ることを当たり前のこととして暮らしてきましたが、震災で突然、水道が止まり、歯を磨くことはおろか、トイレに流す水もなく飲み水さえないのです。

震災から2日目に北区の娘の家に避難しました。小学校で水をいただけると聞き、バケツを持って長時間並んだ挙句、目の前で給水車が空になるということもありました。北区では早くから水道が復旧した地域もあり、近所の方が大きなポリバケツで水を下さり命拾いをしました。貴重なその水を繰り返し、大事に大事に感謝して使いました。

2月1日に自宅に電気がつきました。商売をしておりますので夫と帰宅しましたが水はまだ出なくあちらこちらでいただきながらの暮らしでした。4月3日に私たちの共同ビルに待ち焦がれた水が出ましてやっと洗たく機を使うことが出来ました。屋上で暖かな日ざしを浴びながら洗たく物を干しておりますと幸せと感謝の気持ちで涙が流れました。

震災から11年、また以前の暮らしに戻り、水を当たり前のように使い暮らしています。時には無駄に乱暴に使うこともあるのではないかと思います。私は、あの震災で経験した「水」の有難さを忘れてはいけないと思います。

皆さんに伝えたいことは、「水」に限らず、自然の恵みの中で生かされている人間として、おごり高ぶらず、色々な物に感謝の気持ちを持って暮らして頂きたいということです。

子どもたちへ

1995年1月17日の早朝に震度7の大きな地震が発生しました。
死者6433名、負傷者43792名という考えられない被害をだしました。
この阪神淡路大震災が起こった時、私はまだ幼稚園に通っていました。私の記憶に残っていること、それは真っ暗な部屋の中で「ガシャーン」といって食器がおち割れていく様子です。この地震は6才だった私の心にもはっきりと残る恐ろしいものとなりました。
「あの時、周りの大人に守られて、今私が生きられている」このことにとても感謝しています。
震災から10年。忘れられていくあの恐ろしさ。今10年前のような災害が起これば、また大きな被害をだしてしまうと思います。何千という尊い命を、たった1度の震災で失ってしまう。あの時と同じ思いをしなくてすむようにこの地震の恐ろしさを伝えていかないといけないと思います。
1人1人が災害の恐ろしさを理解し、知識を持っていつでも行動できるようにしておかないといけないと感じます。今あたり前のように一緒にいる家族や友達。このかけがえのない人と一緒にいれることの幸せを感じてほしいと思います。

2005年　12月　1日

お名前　高峰　里佳　より ※

※　この欄は公開しますので、とく名希望の場合はペンネームまたは無記名でお願いします。

No. 111

子どもたちへ

地震が起きると、困ることがたくさんあります。
例えば、地震が起きたとき、水道から水が出なくなりました。

これでは、手を洗うことも
お風呂に水を入れることも出来ません。

私は「給水車」という、水がたくさん入っている車のところへ行きました。

そこには、家で水を使えなくなった人たちが
給水車から水をもらうために
長い列をつくって並んでいました。
みんなの両手には水を入れるための
バケツや、やかんがありました。

私は1時間くらい待って
ようやく水をもらう事が
出来ました。

私はこの時、水って本当に大切なものなんだなあと
感じることが出来ました。

17年　12月　1日

お名前　松井ゆか　より ※

※　この欄は公開しますので、とく名希望の場合はペンネームまたは無記名でお願いします。

No. 054

子どもたちへ

生きている幸せ

今あなたは幸せですか？

お父さん、お母さん、お兄ちゃん、お姉ちゃん、妹、弟

家族がそばにいる幸せ

2本の足で歩ける幸せ

目が見える幸せ

お話ができて お話が聞ける幸せ

あたたかい ごはんが食べられる幸せ

生きている幸せ

こんなあたりまえのことを幸せだと感じていますか？

こんなあたりまえのことを 地震で一瞬にして失う悲しみ

あなたにはわかりますか？

いいえ、わからなくてもいいよ わかるのはそれを失くした人

だけで

だから お願い

あたりまえのことを幸せだと感じてください

平成18年 1月 10日

お名前 荻野 典子 より ※

※ この欄は公開しますので、とく名希望の場合はペンネームまたは無記名でお願いします。

No. 129

ポエム3

子どもたちへ

地震って どんなものなのか 知っている？

「知ってるよ。昔、神戸であったんだよね。」
「新潟でも あったよね。ニュースで見たよ。」
「外国では、大津波も あったんだよね。」

……そんなふうに思っていませんか？

地震はね
昔話でも、遠い外国の話でもないんだよ。
あなたが今いる その場所に
今から 10秒後に起こるかも しれないんだよ。
11年前の あの日も
あの瞬間まで 誰も気がつかなかった……。
自分の身に ふりかかるなんて、思ってもみなかった……。
瓦礫、炎、ケガをした たくさんの人々、
……そして 亡くなった 人々……
決して 昔話じゃないんだよ、絶対 絶対 忘れないで……!!

2006年 1月 17日

お名前 荻野恭子 より ※

※ この欄は公開しますので、とく名希望の場合はペンネームまたは無記名でお願いします。

No. 180

子どもたちへ

あの地震で壊れたもの、失ったものは多かったけれど、得られたものもまた多かった。

その一番は『人の力はすごい！』という発見。あの日、何がどうなっているのか、今どうしたらいいのかわからないまま、とりあえず必要な物をかき集めて中学校の体育館に人々が集まってきた。でも何の情報もないままその日が終わろうとしていたとき、一人の男の人が皆の前に進み出て、名前を名乗り、いくつかの提案をし、仲間を募った。疲れと不安で自分の家族のことだけ考えるのが精一杯のとき、皆のことを考えられる人がいた。薄暗がりの中何人かの人たちが立ち上がり前に集まった。その人たちの勇気と知恵のおかげでまもなく赤ちゃんのミルクを作るお湯が用意され、大混乱もなく大ぜいの人たちの集団生活がスタートした。（そのときはそんな生活が何十日も続くことになるなんて皆思ってなかっただろうけど。）

人の力のすごさを目の当たりにしたのはこれだけではない。ひとりでは何もできない赤ちゃんもその無邪気な仕草で疲れた大人たちを笑顔にしてくれたし、他の人の力を借りないと体を動かせないようだったおじいさんも思いがけないときに力強く暖かい励ましの言葉をくれたりした。

「人は誰だって自分の中に人に喜んでもらえる力を持っているんだ、人の力はすごい！」この発見が地震のときからずっと、私のエネルギーのもとになっています。　　2006年1月12日　東灘区在住者

子どもたちへ

しんさいと外国人

阪神大しんさいが起きた。私は日本に住んで14年のベトナム人です。しかし、しんさいは始めての体けんだった。さいしょは何が起きたか分からなかったが、目の前にげたばこ、食器だな、れいぞうこなどがたおれたのを見て「大変なことがおきたなぁ、じしんかなぁ」と思った。私の家族はこの市住にひっこししたばかりなので物がなかったおかげで全員けがもせずぶじだった。

長い年日本に住んでいるが、日本のさいがい時のシステムは全ぜん知らなかった。さいがいが起きたら何をすればいいのか、どこへ行けばいいのか、ひなんじょはどんなところか、知らないことだらけだった。

ひなんじょでベトナム人たちがあつまった。生きのこるのを分かち合った。しかし、周りの人々に「さわぐな！ウルサイな」とおこられた。ほとんどの人がきゅうえん物資の届くのを待っているのに、ベトナム人は肉、えび、おにぎりなどストーブの上でやいて食べた。また、まわりの人々が「これは万引ちがうの」とうたがいの目であった。実は自宅にある食材を持って来たのだ。「人の支援を待たずに自分が何とかしないといけない」のはベトナムではあたり前の考え方が行動になっただけだった。

しんさいで分かったこと、気がついたこと、けってんをみとめかいぜんしていくことがひつようだと思う。外国人がたくさん住んでいる今の日本は、ふだん生活の中におたがいの文化、しゅうかん、考えかたのちがいなどをりかいしあえる心を持ってほしいですね。

2006年1月25日　ハ　ティ　タン　ガ

子どもたちへ

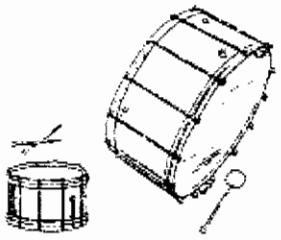
10年がんばってきたね。いろいろな事があったでしょう。

覚えていますか？となりの部屋に灯りがもれないよう布団をかぶり、懐中電灯の灯びで声をひそめて読んだ絵本。全国から送られてきた子どもたちへの服や絵本。とりわけ絵本は楽しかったよね。泣き声がひびくと仮設住宅の周りの川で水遊びをして疲れさせて帰ってすぐ寝たよね。

冬は寒さで洗たく物が凍ってそれも笑いながらがんばったね。ある朝、とっても寒くて「寒い、寒い」と抱き合った。東北に住んだことないけどこんなに寒いものなのかと実感した仮設生活。

ある時は、ピーヒャラドンドン♫なんとチンドン屋さんが仮設に来てくれたね。あなたたちは大喜びで飛び出して行って生まれて初めて生のチンドン屋さんを間近で見た。ちゃんとお化粧した芸者さんもいて、立ち止まって演奏してくれたね。つらいこともあったけど日本中が一体化して神戸の私たちを元気づけてくれた。

あの頃のあなたたちはもう大きいけど、いつまでも忘れないで。どんな時も楽しみをみつけて（あのチンドン屋さんのように）、つらいことがあってもきっと少しでも楽しいことがあるならがんばって、今度はその楽しみをくれた人々にかえしていくんだよ、やさしさを。



17年12月10日　内山真理子

体験から学んだこと

子どもたちへ

震災のとき、私はお母さんにそばにいてもらったから大丈夫だったけど、お兄ちゃんが大変でした。読書が大好きなお兄ちゃんの部屋の本棚が倒れてしまって、お兄ちゃんは重たい本棚の下じきになってしまいました。

私は幼稚園の年長さんだったけれど、ものすごくないてしまったのを覚えています。お兄ちゃんは寝相がわるく、ちょうどその日は枕の下に頭が入り込んでいて、本棚から頭を守ってくれました。お兄ちゃんの寝相が悪くて本当に良かったと思います。

あれから10年たった今もお兄ちゃんはその枕を大切にしています。

今、地球が弱っています。何が起こるかわからない今、家族や友達、大切な人を大事にしてください。

毎日、笑顔でおはようが言えることを大事にしてください。

17年12月1日　川西由希

子どもたちへ

忘れもしませんよ、平成7年1月17日午前5時46分過ぎ、倒れたタンスのわずかなすき間から見えたあなたの足を引きずり出した時の事を。気づいた時には、守る事もできずにバタバタと家具が倒れ、血の気の引く思いで生後8ヶ月のあなたを引きずり出し、スースーと寝息をたてているのを感じてどんなにほっとした事か…。そして非常ベルが鳴り響く中、急いで階段を下り、外へ出て家の前の階段にあなたを抱えてしゃがみ込んでいた私たちに、「返さなくてもいいよ。」と言って掛けてもらった毛布と人の暖かさを。散乱した部屋を踏み分けて外に出てみたら、少し離れた隣の家が真っ赤に燃えていて、でも消防車も来ず、水も出ない中何もできず、一体何が起きたのか、その時はそれが震度7という大地震という事もわか

らないままただ毛布の暖かさと人の温かさだけは感じる事ができました。

あれから10年、あなたは小学5年生となり、毎日元気に学校に行き、休日は色んな行事に参加し、親子して忙しい日々を過ごさせてもらっている事に感謝しています。あなたが生きていてくれているからこそもらえる有と有らゆる親としての有難さを感じつつ…。

世の中では子供を生んでも遺棄したり、子育てを放棄したり、また小さな子供を平気で殺したりと大変悲しい事件が相次いでいますね。将来ある彼らは、きっと生きていたかったでしょうに、そして楽しい事をしたかったでしょうにと思うと悲しさで胸が一杯になります。あの日亡くなられた6千余りの方々も突然に亡くなられ無念の事だったと思います。そんな方々の事を思うと、今、生きている事に感謝し、毎日を大切に生きてほしいと思います。

ただ、本当の事を言うと、あの日あの時の事を思うと今でも涙が出て息苦しくなる時があります。時々地震の話はするけれど、できれば避けたいという気持ちが、まだあります。でも、やはりあの日の事は忘れず、大事に伝えていかないといけませんね。住んでいた建物が全壊になり、しばらく家族バラバラで生活した事、転居するために近くに住んでいたお友達と離れ離れになってしまった事など悲しい事がいっぱいあったけどたくさんの人たちのお世話をいただいたおかげで、また、家族一緒に暮らせるようになった事、辛い事もあったけど元気に生きている事、そして何より新しいお友達がたくさんできた事。それもすべてはあなたが生きていてくれたからこそできた事と思っています。

私が、時々、あなたの顔をまじまじと見るでしょ？その時は私が、あなたが生きていてくれている事に感謝している時です。だからあなたも決して命は粗末にせず、生きている事に感謝し、そして、今まで以上に人に優しくしてあげて下さい。その先に自分なりに人のために何かをしたいと思う気持ちが芽生えていけばいいなと思っています。そんな日を願いつつ、先ずは一日一日を大切に生きていきましょうね。

感謝の気持ち

子どもたちへ

私は震災のとき新聞社で記者として働いていました。高速神戸の駅の上のワンルームマンションで被災し、ゆれがおさまった後倒れてきた本をふんで、たくさんきこんで、すぐ近くの神戸支局へと走りました。その日から、被災した人たちへの取材が始まりました。自分は、家の物がおちてきて多少のものが壊れただけ、家族にも友人にも大きな被害はありませんでした。

被災者であって被災者でない状態で、家を失ったり、家族を亡くしたり、仕事を失った人、さまざまな被害をおった人たちに何が自分にできるのかととても悩みました。話を聞いたって何もならない…。苦しむ人に取材をしたり、写真をとったりして申し訳ない。つらい思いをさせているだけなのかもしれないと思いました。

でも、そんな私に、勇気を与えてくれる人がいました。こんな私でもあたたかく迎えてくれる人がいたのです。それは焼け野原となった長田の菅原商店街の人たちでした。ある一家は焼け野原に一ヶ月後にはプレハブを建てて、みんなにがんばる勇気を与えました。まっくらな周囲の中で、一軒のプレハブは、どんなに皆に希望をもたらしたでしょうか。取材に訪れた私をあたたかく迎え暖をとらせてくれ、あたたかい飲み物を飲ませてくれました。何も失っていない私に対して、全てを失った人がこんなにやさしく自分に接してくれるのが本当にうれしかった。私を迎えいれても、何の得にもならないのに、家族のように接して「かぜひいたらあかんで」と心配してくれたのです。

自分が一番ピンチのときに、どん底にあっても、
人にやさしくできる、気づかうことができると
いうのは本当にすばらしいことです。
人間のすばらしさを、やさしさを教えられました。

2006年1月28日　土井教子

子どもたちへ

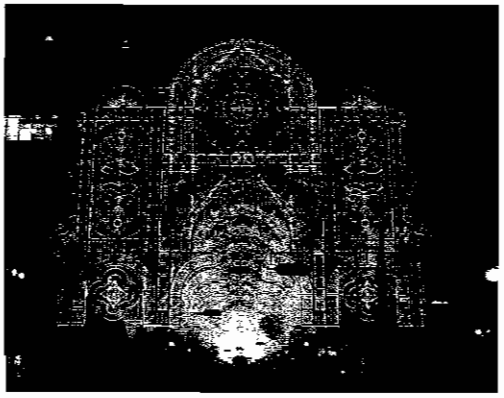
11才になった実咲へ。

今年もルミナリエ一緒に見に行けましたね。とてもきれいでしたね。毎年お母さんはあなたにルミナリエの意味を説明しながらあなたと見てきました。10年前、あなたはまだ8ヶ月の赤ちゃんだったので家が大きく揺れた事も知りませんよね。お母さんも気づいた時はあなたの上に覆い被さり、タンスの上から落ちてきた衣装ケースが背中に当った痛みで何が起きているのかさえわからないぐらいでした。家の中はひどい状態でしたが、家族が皆、無事で良かったと本当に思いました。特に、赤ちゃんだったあなたを守りきれて。

今は小学校や色々な事を通じてあなたもわかっていることと思いますが、多くの人たちがあの地震で建物の下敷きになったり火事で亡くなりました。お母さんは追悼の意味で、毎年あなたをルミナリエに連れて行っています。毎年一緒に募金もしましたね。いつもならお母さんからもらったお金を募金箱に入れていたあなたでしたが、今年は違いましたね。「自分のおこづかいからしないと意味がない」と言って自分の財布から100円玉1枚を出して箱にそっと入れてくれましたね。お母さんはとってもうれしかったです。

あの大地震で夢をいっぱい持っていたはずの子どもたちが亡くなりました。その子たちの分まであなたは学び、遊び、成長していってほしいと思っていましたから。

また来年も一緒にルミナリエを見に行きましょうね。



©Valerio Festi/I&F Inc./Kobe Luminarie O.C.

このメッセージを読(よ)んであなたが感(かん)じたことを書(か)いてみてください。

子どもたちからの感想文

平成16年度中に寄せられたメッセージを協力校となっていただいた学校にお届けしたところ、小・中学生から感想文をいただきました。

その中から、4通の感想文をご紹介させていただきます。

メッセージありがとう

板宿小学校

私は地震の時、小さかったし神戸にいなかったからよく覚えてないけど、おばあちゃんにそのときのことをおしえてもらいました。家中のものが倒れてきたり、道路がわれていたり、とにかく大変だったと聞きました。

あの阪神淡路大震災から 11年、私たちの学校では毎年1月17日についとう式をします。その時に亡くなった方々のことを思って「これから自分はこんな生き方をしよう！」と決意します。私はいつも「亡くなった方々の分も楽しく生きよう。」と、決めています。今年は「地域の人に協力してもらって車イスをおして学校まで避難する。」という訓練をしました。その時に、車イスに乗っている人を恐がらせないように気を付けていました。もし、地震がおきたら道はがたがたでうまくいかないと思うけど、できることだけでもいいのでお手伝いをしたいです。

子どもたちへのメッセージを読んで

塩屋小学校　6年　金月大樹

阪神淡路大震災の時、ぼくは 1才でした。地震で家が揺れている間もスヤスヤと布団の中でねていたそうです。だから、地震の事は何も覚えていません。

「子どもたちへのメッセージ運動」は、そんなぼくたちに生命の大切さと震災での教訓を語りつぐ運動だそうです。いつも、「命を大切に」とか「一番大切なものは命」と言われたり、思ったりしていますが、自分の命だけでなく、家族の命、知らない人の命もみんなで必死に守らないといけないんだなぁと思いました。

ぼくは、弟や友達とケンカした時、「死ね」と口にしてしまう事があるけれど、これからは、かんたんに言わないように気をつけます。そして、またいつどこで起こるかもしれない震災に備えて、どんな所でも生きぬく力と人の気持ちを思いやれる優しさを身につけていきたいと思います。

感　想

樫野台小学校　　安東友香

私は、「はくさいなべ」を見て色々なことを感じました。これを書いた人は、本当に大変だったと思います。24時間ず～っと働いて、ケガ人はたえないし、でもそんな時、のうかの人がはくさいをくれたら、私がこの人だったら、なみだがとまらなかったと思います。うれしくて、うれしくて、それはもぅ、もんのすごくおいしかっただろうなァ～。つかれた時、悲しい時、そうやって、手をさし伸べてくれる人がいるということは、とってもありがたいことなんだなと改めて感じました。

あのビデオは 4年生のとき 1度見ましたが、何度見ても感どうします。あんなに小さい子が一生消えない悲しみをあじわったと思うと私もかなしくなります。でも、じしんで、新しい生きかたを見つけたり、人と人とのつながりが深まったり、いいことだって少しはあるんだと思いました。

「子どもたちへ」感想

友が丘中学校　2年3組7番　遠藤友香

地震のことはおぼえてないから恐いというのはわかりません。でも命の大切さは分かっているつもりです。会えなくなるさみしさや、もうその人の声をきけないつらさ、もうその人のあたたかい手を感じることのできない、どうしようもない悲しみもわかっています。

地震でどれだけまちがこわれたのか写真で見ただけでおぼえていません。私は長田に住んでいました。家族はケガをした人もいましたがみんな無事でした。私は一生懸命生きることはとてもつらくむずかしいことだと思います。どうむずかしいのかうまく言えませんけど・・・。勇気がいると思います。苦しいことや悲しいことがあっても負けない勇気がいると思います。

「しあわせ運べるように」はいとこが歌っていたのですぐにおぼえました。

そういえば、おばあちゃんが私と妹によく「生まれてきてくれて本当にありがとう」と言ってくれました。

そのときはよくわからなかったけど、今なら少し分かるような気がします。だから私は母に「生んでくれてありがとう」って言いたいです。少しはずかしくてまだ言えませんがいつかきっと言いたいです。

私の妹は震災があって2ヶ月後ぐらいに生まれました。

ケンカばっかりしてるけど
大切な家族。
私のたった1人の大切な妹です。
私は家族が大好きです。

さいごに

このメッセージは、阪神・淡路大震災を知らない・よく覚えていない子どもたちに、命の尊さや震災の教訓を語り継ぐために寄せられたものの一部です。

このメッセージが子どもたちの心に届きますよう、みなさまのご協力をお願いいたします。

子どもたちへのメッセージ運動の概要

「子どもたちに伝えたい、阪神・淡路大震災に関連する経験や思い」をテーマとして、震災のときに生まれた子どもたちが大人になるまで、毎年、メッセージを募集し、伝えつづけていく予定です。

〈平成 16 年度〉

募集期間　　：平成 16 年 4 月7日～平成 17 年 1 月 31 日

応募数　　：557 通

メッセージ展：

平成 17 年 3 月 17 日～3 月 30 日　市役所 1 号館 2 階市民ギャラリーにて開催

その他の活動：

市内の小中学校（協力校）へ全てのメッセージの原文をお届けしました。また 557 通のうち、34 通のメッセージを「子どもたちへのメッセージ集　２００５」の冊子にして神戸市立学校全校へ各クラス 1 冊ずつ送付しました。

〈平成 17 年度〉

募集期間　：平成 17年2月1日～平成 18 年 1 月 31 日

応募数　　：256 通

今後の活動：

平成 16 年度同様、市内の小中学校（協力校）へ全てのメッセージの原文をお届けし

ます。また256通のうち、26通のメッセージを「子どもたちへのメッセージ集２００６」の冊子にして神戸市立学校全校全クラス及び神戸市立小学校全５年生に１冊ずつ送付します。

なお、神戸市のホームページに、主なメッセージ及び全メッセージの抜粋版を掲載しています。

〈平成18年度〉

前年度同様に、メッセージを募集しています。（平成19年1月31日締切）

詳細は、神戸市のホームページをご覧いただくか、お問い合わせください。

http://www.city.kobe.jp/cityoffice/18/menu03/t/humanrights/home2.htm

お問い合わせ先：神戸市保健福祉局総務部人権推進課　　電話322-5234・5

《子どもたちへのメッセージ運動の活動（募集、メッセージ集編纂等）にご協力いただいた方々》（敬称略）

クリスタル・ベル、神戸学院大学地域研究センター、神戸市混声合唱団、神戸市ＰＴＡ協議会、神戸市立幼稚園 PTA 連合会、神戸市立小学校 PTA 連合会、神戸市立中学校 PTA 連合会、神戸市立高等学校 PTA 連合会、神戸市立盲・養護学校 PTA 連合会、神戸市老人クラブ連合会、神戸デザイナー学院、神戸ヤングクリエイティブクラブ、サークル紙ふうせん、大日通周辺地区まちづくりを考える会、日本赤十字社兵庫県支部及び声の図書奉仕団

《これまで協力校となっていただいた学校》

本山第二小学校、春日野小学校、池田小学校、板宿小学校、塩屋小学校、樫野台小学校、葺合中学校、友が丘中学校、鷹取中学校、兵庫県立舞子高等学校

＜参考資料＞ 震災10年～神戸の記録～（平成16年10月神戸市広報課発行より抜粋）

※ただし、「阪神・淡路大震災　被災状況及び復興への取り組み状況」（平成18年1月1日現在）により一部変更。

神戸市の被災状況等

震災は、多くの命を奪うとともに、都市基盤や建築物に甚大な被害を与え、市民に直接的な大被害を与えた。また、復旧の長期化に伴い、産業、都市機能、生活などに様々な影響を及ぼしている

(1) 市民生活への被害

① 多大な犠牲者
- 死亡者　４，５７１人（H17.12.22）
- 不　明　　２人
- 負傷者１４，６７８人（H12.1.11）
- 高齢者（60歳以上）が死亡者の約59%*
- 家屋倒壊による死者多数（窒息・圧死が全体の約70%*）

※　高齢者、家屋倒壊による死者の割合は、平成17年12月22日現在（死者4,571人）での割合
（ただし、窒息・圧死の割合は直接死3,895人での割合）

② 避難
- ピーク時：箇所数599箇所（H7.1.26）
  避難人数236,899人（H7.1.24）
  避難所就寝者数222,127人（H7.1.18）

③ 公共施設の被害
- 市役所、病院等の重要公共施設の破損、倒壊

④ 学校教育・社会教育・文化施設の被害
- 学校園の約85%が被災
- 博物館、中央図書館旧館、ポートアイランドスポーツセンター等の破損、倒壊
- 酒蔵、異人館等の破損、倒壊

(2) 都市機能の被害

① 建築物、構造物の被害
- 全壊67,421棟、半壊55,115棟（H7.12.22現在）

② 火災による焼損（確定値）
- 全焼6,965棟、半焼80棟、部分焼270棟、ぼや71棟
- 延べ焼損面積 819,108㎡
- 火災件数175件（震災とほぼ同時に54件発生）

③ 交通ネットワークの寸断
- 阪神高速道路３号神戸線、同５号湾岸線等の倒壊
- 陥没、高架構造物の落下、建築物倒壊等による道路不通
- 鉄道の寸断
- 海上都市へのアクセスの寸断

④ 港湾施設等の被害
- コンテナバース、岸壁等がほとんど全て使用不能
- 港湾幹線道路の寸断

⑤ 埋立地の液状化
- 東部２～４工区、ポートアイランド等で液状化

⑥ ライフラインの寸断
- 電　気　　市内全域停止
  （応急復旧に要した期間　７日間）
- 電　話　　約25%停止
  （応急復旧に要した期間15日間）
- 水　道　　市内ほぼ全域停止
  （応急復旧に要した期間91日間）
- 工業用水道　市内全域停止
  （応急復旧に要した期間84日間）
- ガ　ス　　約80%停止
  （応急復旧に要した期間85日間）
- 下水道　　管渠・ポンプ場破損、処理場の機能低下（27箇所）及び機能停止（17箇所）
  （応急復旧に要した期間135日間）
- クリーンセンター　全クリーンセンターの運転停止
  （応急復旧に要した期間35日間）

⑦ 公園
- 1/3の公園が擁壁崩壊、舗装陥没、地割れ等の被害

⑧ 河川
- 二級河川　　117箇所破損
- 準用・普通河川　27箇所破損

⑨ 治山・砂防
- 緊急復旧を要する箇所　68箇所

⑩社会・産業面の資本ストック全体の損害額（推計値）
- 約６兆９千億円

(3) 神戸産業の被害

① 基幹事業所及び製造大手企業
- 本社等中枢建築物の倒壊
- 生産ラインの停止

② 中小企業・地場産業
- ケミカルシューズ　約80%が全半壊または全半焼
- 清酒造　　50%以上の企業が全半壊

③ 市場・商店街
- 旧市街地の商店街の約1/3、市場の約半数が甚大な被害

④ 観光・コンベンション施設
- 観光施設、宿泊施設、コンベンション施設などで建物損壊などの被害

⑤ 農漁業施設
- 漁港、漁船だまり、農地、農業用施設等が多数被害

(4) その他

上記の直接的被害にとどまらず、避難所生活に伴う精神的疲労や子ども・高齢者・障害者等への心理的影響、学校等教育機能の低下、ライフラインの復旧の遅れや交通渋滞などによる都市機能の低下、雇用の不安定化など、市民の生活に対して様々な面で、震災が影響を及ぼすこととなった。また、産業面においても、企業の市外への移転や被災による生産量の低下、港湾施設の被害に伴うコンテナ貨物の他港へのシフト、高速道路の寸断や復旧工事による交通容量の不足等により、神戸のみならず、日本経済へ深刻な影響を及ぼすこととなった。さらに、大量の災害廃棄物処理や、これに伴う環境への影響など、震災がもたらした被害は、広範囲で多方面にわたる深刻なものとなった。

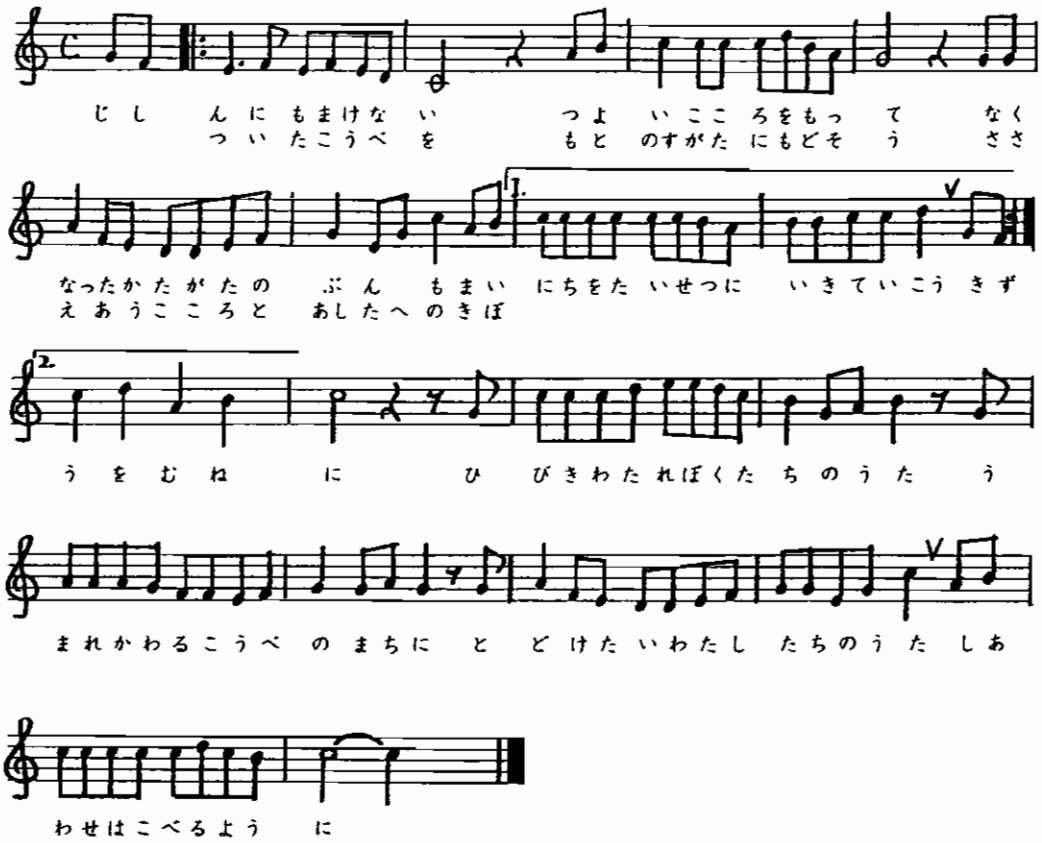
(5) 旧避難所等・仮設住宅・災害廃棄物処理について

① 旧避難所　避難所は平成７年８月20日で終了し、待機所を平成９年３月31日まで運営。

② 仮設住宅　○建設戸数 32,346戸（市内29,178戸、市外3,168戸）○撤去状況　全敷地原状復旧済。

③ 災害廃棄物処理（平成10年３月末最終）
○実績　解体済 61,392棟（100%）

しあわせ運べるように　作詞・作曲　臼井　真



一、地震にも　負けない　強い心をもって　亡くなった方々のぶんも
毎日を　大切に　生きてゆこう
傷ついた神戸を　元の姿にもどそう
支え合う心と　明日への　希望を胸に
響きわたれ　ぼくたちの歌　生まれ変わる　神戸のまちに
届けたい　わたしたちの歌　しあわせ　運べるように

二、地震にも　負けない　強い絆をつくり　亡くなった方々のぶんも
毎日を　大切に　生きてゆこう
傷ついた神戸を　元の姿にもどそう
やさしい春の光のような　未来を夢み
響きわたれ　ぼくたちの歌　生まれ変わる　神戸のまちに
届けたい　わたしたちの歌　しあわせ運べるように
届けたい　わたしたちの歌　しあわせ運べるように

～命の尊さと震災の教訓を語り継ぐ～

「子どもたちへのメッセージ運動」の取り組みをご紹介します

子どもたちに命の尊さと震災の教訓を語り継ぐため、平成16年4月に運動を始めました。

平成16年度には557通のメッセージが、平成17年度には256通のメッセージが寄せられました。

２月～翌年１月
メッセージを募集

３月中旬～下旬
市民ギャラリー展示

９月～11月
子どもたちに届けます

発　行：平成18年10月
発行者：神戸市
編　集：神戸市保健福祉局総務部人権推進課 電話078-322-5234・5
協　力：神戸市教育委員会指導部人権教育課
〒650-8570　神戸市中央区加納町6丁目5番1号
広報印刷物登録平成18年度第201号A-1

この冊子は、古紙配合率100%の再生紙を使用しています。